
タスマニア森林伐採問題で現地に行ってきました

日消連 山浦康明



林道工事で伐採された原生林

オーストラリアは鉄鉱石、石炭、ウラン、農産物の輸出大国ですが、木材生産も盛んで、日本にも木材チップが多く輸出されています。大陸の南東部にある北海道ほどの面積のタスマニア州も原生林が生い茂り、非常にユニークな生態系を持ちこの島にしかないオナガイヌワシやオトメインコなどの希少生物もいます。しかし巨大木材会社「ガンズ社」と州有林の供給元である「タスマニア林業公社」の無責任な伐採によりこの森は急速に破壊されています。このたびこの問題に取り組んでいる現地の環境保護団体「ウイルダーネス・ソサイアティ」の招きを受け現地を訪れました。

9月6日、オーストラリア緑の党（1970年結党）の創設者で今も代表を務めており、連邦議会の上院議員兼タスマニア州議会議員でもあるボブ・ブラウンさん、同じく同党所属で連邦議会の上院議員兼タスマニア州議会議員のクリスチーナ・ミルンさんにお会いし、1983年のダム建設反対運動以来のこの島の環境保護運動の歴史を聞きました。

環境保護派の人々は西部の山岳地帯を国立公園に指定させ、また山麓を世界自然遺産に指定させて、樹齢400年以上のオールドグロス（原生林）を守ってきたのです。しかし開発側は、皆伐はしないなどと言いつつも山麓の貴重なユーカリを伐採してきました。オールドグロスの定義を都合よく解釈し、伐採対象にしたり、島の面積の40%を保護してきた、と言いつつ実



オーストラリア緑の党・党首のボブ・ブラウンさん(豪 上院議員)の事務所(左から3人目がブラウンさん、4人目が上院議員のクリスチン・ミルンさん。)左から二人目は筆者

際には森ではなく山岳地域やボタン草や藪などの地帯を主に保護対象としており、オールドグロスを含む公有林を伐採してきたのです。そしてその跡は焼き払いユーカリのプランテーションとしています。



上空から見たタスマニア島北部、真ん中の白区画が伐採されたプランテーション地区



伐採された原生林(中央部分)



オールドグローブス(樹齢400年のユーカリ)



林道開発に反対するために作られた
環境保護団体のツリーハウス

更に開発側は島の北部のランセストーンに巨大なパルプ工場を造りパルプの生産量を大幅に増加させようとしています。この工場の稼働によって大気が汚染され、排水によって周囲の水質も悪化するおそれがあります。この島の魚介類は高品質で日本にも輸出されていますが、彼らは汚染が心配だ、と述べました。生産されたパルプはティッシュペーパーやコピー用紙の原料として日本製紙（株）などが買っているのです。

こうしたことがまかり通っている背景には認証制度の問題点があります。ウィルダネス・ソサイアティのショーン・キャドマンさんによれば、オーストラリア森林管理標準（AFS）は政府と木材業者らが作ったもので、天然林の保護とプランテーションの認証を行う、とされるものの事業者都合のよいものである、と批判しました。価値ある森であってもオールドグローズを含め皆伐し、跡地を燃やし、希少動植物を根絶やしにする、使用する毒物でタスマニアデビルには感染力のあるガンも発症していると、指摘しました。彼らは国際ネットワークである「森林管理協会」のFSC認証のほうが、まだましだ、と語りました。

9月7日には一日かけてウィルダネス・ソサイアティのジェフ・ローさんの運転する車で林道に入り、さらに徒歩でスティックス・バレーとフロレンティン・バレーのオールド・グローズを見にいきました。ここは州都ホバートからわずか90キロメートルながら「キングユーカリ」と呼ばれる95メートルの高さがある巨木が生えています。樹齢は400年以上です。幹の回りは5メートル以上もあります。幹の表面には苔が生え下草には大きなシダ類も多く見られます。季節は早春でしたが、緑あふれる豊かな森が広がっていました。ところが、ここは「タスマニア・ウィルダネス世界遺産」のへりにあたり、その範囲のわずか外側に位置づけられています。そこで林業公社は森林伐採の対象にしてしまったのです。ジェフさんらはオールドグローズの基準となる巨木を次々に見つけ出し、その周囲100メートルの地帯を保護する運動を1999年以来続け世論に訴え今はこの谷の森の多くは伐採を免れました。

次にやはり世界遺産地域周辺のアップパー・フロレンチンの谷へ行きました。ここもオールド・グローズとして指定される価値のあるキングユーカリがたくさんあります。また、雨林地帯の木々やボタングラス、貴重な動物たちの暮らす地帯です。しかし森林公社は強引に林道を延ばし伐採地を広げようとしています。環境保護派の人々はここでも抵抗運動を続けており、また世界自然遺産の地域の範囲に入れるよう要求しています。

ボブさんとクリスチーナさんは、すばらしい観光資源のこの森を残し、世界中の人々がそれを見に来てくれることの方が島の人々のためにもなる。質のよいユーカリ材は家具や船舶の部品などに使うべきだ。この島は比較的温暖で野菜、果物、麦酒、ワインなども生産されオーストラリア本土や世界に輸出されている。環境を保護して人々の暮らしも成り立つようにした方がよいと強調しました。

07年11月現在、この巨大パルプ工場の建設問題は現地でホットな話題となっています。これは日本に紙原料供給を行っている「ガンズ社」が行おうとしている危険な事業です。これはタスマニア北部にあるタマール渓谷の膨大な森林を原料にして操業しようとするもので、毎年700万トン以上の木材チップを生産するように事業拡大を進めようとしています。このパルプ工場は天然林原料を使用するためタスマニアのまだ保護されていない最後の森林原生地域での伐採が増加されます。またこのパルプ工場はバス湾の海洋環境にとって極めて有害な化学物質を放出し排水汚染を引き起こすことが危惧されます。これによってワイン生産の拠点であり観光にとって不可欠な場所であるタマール渓谷の大気を汚染します。しかし建設に対する環境影響評価では、天然林破壊や気候変動への影響が適切に考慮されていないのです。

そしてこのガンズ社に融資しようとしているのが、オーストラリア・ニューゼaland銀行です。07年11月19日、環境保護団体レインフォレスト・アクション・ネットワーク（RAN）の呼びかけで、日消連も東京新丸ビルにある同銀行に融資を中止するように申し入れ、ビルの前でちらしを配布しました。

私たち日本の消費者は質の良い廉価な木材チップスを原料に日々の生活を行っています。しかし経済のグローバル化のもと、日本国内の森の管理ができなくなったからといって安易に海外の資源に頼る生活を続けてよいのでしょうか。日本人が海外旅行であこがれるタスマニアの自然が私たちの生活の維持のために犠牲になっていることを知ったとき、こうした悪循環を断ち切る決断をしなければならぬと強く感じました。